



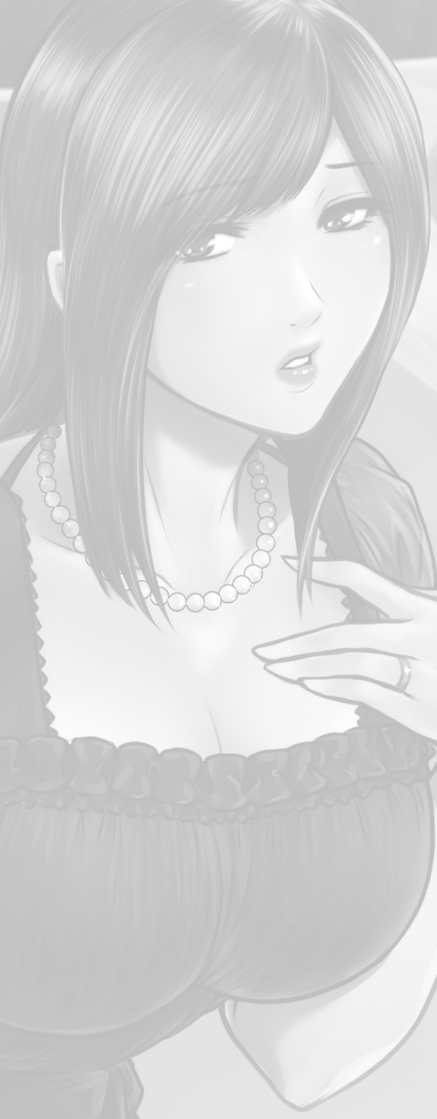
不貞妻 詩織

視線を感じて、私……

空蝉

挿絵／このき奈緒

立ち読み版



Contents

目次

第一章	夫婦の日常	4
第二章	裏切り始め	18
第三章	口淫指導	73
第四章	すれ違いの行き着く先は	114
第五章	あの頃に戻って	155
第六章	公園デビュー	200
第七章	最高のパートナーと至高の宴	248

登場人物

Characters

竹谷 詩織

(たけやしおり)

肉付きの良いEカップバストの専業主婦。二十八歳。おっとりした性格で押しに弱い。地味で自分を表現できなかった高校時代にコンプレックスを抱いている。

幹本 ユウゴ

(みきもと ゆうご)

詩織の高校時代の同級生であり、同じ文芸部に所属していた、小太り体形の男。詩織に当時から恋焦がれており、偏執的な性根が顔に出ている。会社の重役。

竹谷 幸太郎

(たけや こうたろう)

詩織の夫。大学時代に詩織と出会い、後に結婚する。三十歳のサラリーマン。ユウゴの会社と仕事上の付き合いがある。

第二章 裏切り始め

1

三十人強の大所帯で賑わう宴席。ホテルの一室を貸し切りにして行われた同窓会の会場で、詩織は隅の席に腰を下ろし、浮かない面持ちで周囲の喧騒を眺めていた。

『え。マジであの篠宮しのみや? 眼鏡かけてないからわかんなかった』

『凄く綺麗になったね』

一時間ほど前。開宴直前に顔を見せた詩織を見て、列席者は一様に驚き、瞬く間に周囲に人が集まった。

結婚している事。夫はエリート街道を歩み、根っから真面目で常に人の輪の中心に居る人物で、スポーツマンでもある事。夫婦仲が良好な事。一戸建てに住んでいる事。専業主婦として、何不自由のない生活を送れている事。

話すにつけ同性からは羨望の聲が上がり、男性陣からは「惚気話かよ」などと冗談めかした囃しが飛ぶ。最初は旧姓の「篠宮」「篠宮さん」だったのが、結婚の事実を

告げた後に「竹谷さん」へと呼び名が変わり、夫が選んでくれたコーディネートも好評で、詩織自身の均整の取れたプロポーションも称賛された。

『高校の頃から胸は大きい方だったもんね。実は、体育の着替えの時とか結構羨ましく見たのよ。ほら、あたしAカップだったじゃん？』

当時のDカップから、さらにワンカップ成育したバストに、同性の羨む目が注ぎ、
『ああ。隠れ巨乳じゃね、つって男子の間でもいつとき話題になってたなあ』

優越感に浸っていたせいで、異性からの好色な視線もさほど気にならなかった。

『しっかし髪型変えて眼鏡取るだけで、こどもも見違えるかね。高校の時に気づいてたら、俺絶対告ってたのになあ』

『はは、清純派が好みだったもんなお前！』

清純派。そう評されて真つ先に、夫の顔が浮かぶ。彼に見初められ、彼の趣味通りに磨かれたのが今現在の自分だ。だから夫が褒められたも同然で、何よりその事が詩織の自尊心をくすぐる。

振り返れば、この時が優越のピークだったと思う。

『このウエストのくびれとか羨ましいなあ。マジで同い年？ つて思うよね〜』
太り気味の同性からの、冗談めかしてはいるが声の響きでバレバレの嫉妬を浴びた。

『見ろよ。胸もいけど……あのケツ。ドレス越しにもむっちりぶりがすげえわかる』
『ば、馬鹿。声！……ハハ、ごめんね竹谷さん。こいつもう酔ったみたいでさ』
ひそひそと話しているつもりが、早々に酔ったために声量を間違えた男性の下卑た
発言が届き、それまでの昂揚感が嘘のように嫌な気分になせられた。

周囲の者が慌てて諫めるも、後の祭りだ。

『おバカっ。人妻に何てこと言ってるの。ほら謝って！』

『あてっ。ああ……つと。ごめんなさいっ』

『ハハハ、ざまあ』

高校当時もクラスのとめ役だった女性が、暴言男性を叱り、軽く小突く。揺さぶ
られた男性はよろけながらも、ぺこり。まるで子供みたいにお辞儀して謝った。それ
で場の空気は再度和やかに戻り、笑い話に花が咲く。

『ほら、竹谷さんも、飲も飲も』

『それじゃ……乾杯！』

気を利かせた女性陣が集まって、ビールを注いでくれ、瞬く間に酒宴の熱が上がっ
ていったが——ただ一人。詩織だけが、その熱に乗りきれなかった。

(結局は、見せ物じゃない)

薄着になった事で際立って異性の目を惹くプロポーションへの度の過ぎた暴言が、周りが思う以上に暗い影を落とした、その結果。昂揚が鳴りを潜めると同時に生来の内気が顔を覗かせる。氣遣って集まる同窓の面々に、ろくに応対できぬまま俯いたのもまざったと、落ち着いてきた今にして思う。

結局。詩織の話題は一過性の盛り上がりのみ残して、消失した。

当時の思い出話に盛り上がる会話の中で、相槌しか打てない詩織に話しかける人物は、次第に目減りし、開宴から一時間経過した今は単身、暇を持て余している。

「でさ、あの時は……」

「うんうん。だよね。それでアイツが……」

「あつたあつた！ そんな事。ハハハハハッ」

詩織にとっては一つも懐かしくない話で盛り上がる人々。ぽつんと取り残された気分ですら座る状況は、高校当時と変わらない。

「お子さん、何歳？」「わ。こっち見て笑った。可愛い」

隣の田卓から、見覚えのない女性達の会話が漏れ伝わる。

「でも、手がかかるし大変なのよ、本当は一人だけでいいかなって、旦那と話してたんだけどね。まあデキちゃったもんはしょうがないし」

小さな男の子をあやす傍ら、大きく膨らんだ自身の腹部をもう一方の手でさする同い年の——やはり詩織の記憶には残っていない女性。口振りとは裏腹に、愛しげに腹部と長男の頭を撫でる彼女の方がよっぽど幸せであるように思えて、余計先刻の「見せ物となった自分」を惨めに感じた。

それもこれも、居場所のなさを覚えているがため。高校当時の卑屈な心持ちが再来しているせいだ。結論付けたところで変わらぬ現実から、せめて気を逸らすべくビールの入った杯を呷る。

お喋りに熱中しているのと、酔って注意力散漫になっているのも手伝って、「話の合わない元クラスメイト」を気にかける者は、もういない。

出がけの昂揚が嘘のように、苦い感情が、酒の熱と一緒にになって詩織の身に蔓延していた。きつと、こっそり場を辞しても誰も気づかない。

——帰ろう。優しく頼もしい夫の待つ家に、今すぐ。
意思を固めて、詩織が席を立った矢先。

「……篠宮、じゃなかった竹谷さん。飲んでる？」

小太りな、中背の男性が歩み寄り、声をかけてくる。その彼は、眼鏡をかけた風貌こそ冴えないものの、上等のスーツにネクタイを締めて堂々としているために、年齢

以上の風格が備わっているように見受けられた。

「え……あ、はい。でも、ちよつと酔つてしまつて」

この場にいるという事は、同い年の同窓生に他ならないのだが、氣後れして、敬語じみた口振りとなつてしまふ。その事を咎めるでも、一笑に伏しもせず。

「ボクの事、覚えてないかな？ ほら、文芸部で一緒だった……」

詩織が氣恥ずかしさや遠慮を自覚するのに先んじて、正面席に座つた彼が尋ねてきた。

「えっ……幹本^{みきもと}、君？」

記憶を手繰り寄せて思い浮かんだ人物の名を口にすれば、真向かいに立つた小太りにこやか顔が頷いて、肯定の意を示す。

幹本ユウゴ。高校三年間、同じ文芸部に所属した異性のクラスメイト。二年と三年の時はクラスも同じで、二年間一緒に図書委員も務めた。

と言つても、当時はほとんど言葉を交わさなかつたと記憶している。共に内気な性分だつたし、一緒に部室や図書室に居ても、互いの領分に踏み入らない空氣が自然とできていた。異性として意識する機会も一切なく、そもそも話す糸口を探ろうと思つた。対象ではなかつた。

ゆえに、高卒以来の再会にも特段の感慨はなく。

「じゃあ、乾杯」

「う、うん。じゃあ」

敬語こそ取れたものの、ぎこちなさが多分に残った状態で、差し出されたユウゴの杯に遅れて杯を突き合わせ、乾杯する。記憶の中の彼にない積極性に戸惑っていると、元々細い目をにこりと歪め、ユウゴの方から話題を振ってくれた。

「今でも時々、思い出すよ。あの部室の、薄暗さと、こもった匂い」

彼の発した第一声は、詩織が高校当時抱いていた部室の印象と全く同一のものだ。今宵初めて得られた共感が、居場所のなさを嘆いていた心根にジンと染む。

「……っ、わ、私も。うん。……懐かしい」

食いつき気味に応じてしまった事を恥じて俯いた詩織を見ても、彼は吹き出したりせず、ただしみじみと思い出語りを続ける。その気遣いのいらなさが、強張っていた詩織の緊張を一つずつほぐし取っていった。

「部室で読書する時って、よっぽど寒い時期以外は、いつもカーテン全開で、窓も隙間風が入る程度に開けてたじゃない？ エアコンなんてなかったから」

ユウゴはそこまで言って、ちらと詩織に目をやり、続きを待つように口を噤む。言

い出したくて、でも言い出せずに遠慮していた詩織にしてみれば、まさに渡りに船。浮き立つ気持ちのままに、同じ時間を共有していればこそ導ける正答を口にした。

「……夏の暑い日は、大変だったよね」

「ボクなんて今よりだいぶ太ってたからなあ。汗だけで、余計暑苦しい空気を醸し出しちゃってたよね。ごめん」

そもそも他人の匂いに気を留めてすらいなかった。むしろ、振り返ってみて今更「当時の私は自身の制服の汗ばみとか、汗の匂いだとかを気にしなすぎた」と、自らの無配慮を恥じたくらいだ。

「ううん。全然気にならなかつたよ。……私の方こそ無頓着だったかも。不快な思いさせてたら、ごめんなさい」

「わ。そんな畏まらないで。ほら、飲もう。で、楽しい思い出をもっと語ろうよ」

かえって気遣わせてしまった。つくづく自分は人付き合いが下手だ。自虐する詩織の様子を見て取ったユウゴが、不意に席を立った。そして、驚く詩織を残していずこかへ歩み去ってしまう。

「あ……っ」

卑屈になる事で辟易させてしまったのだろうか。折角の楽しい時間をふいにしてし

まった。一人残されて後悔する詩織の前に、さほどの間も置かず二杯のカクテルを手にした彼が戻ってくる。

「これ、そんなにアルコールきつくないし、甘めだから。ビールよりは竹谷さんの口に合うかなと思って」

高校時代は、現在と比べて二十キロ以上は肥えており、ボサボサの髪で、厚い眼鏡をかけ、お世辞にも整っていると言い難い容姿をいつも俯かせていた彼。根暗で、自分からは誰とも話さない、他人からもほぼ見向きもされな存在だった彼が、今、見違えるように大人の男になっている。同類と勝手に思っていた彼に置いていかれた気がしてまた俯きかけた詩織だったが――。

「窓から夕陽が差し込む時間帯が好きだったなあ。部室が茜色にライトアップされたみたいで」

お構いなしにユウゴが語りを再開させると、また自然に惹き込まれてゆく。

「ほ、本の虫干しを頼まれた時とか。大変だったよね」

「普段は部室に来もしない顧問の加藤かとう先生が、急に言い出したんだよね。部屋が本臭いとか言ってる」

互いの記憶と認識を摺り合わせるように、交互に語らう。想いを共有できる喜びを、

夫の幸太郎以外と味わったのは、何年ぶりだろう。部室の印象同様に薄暗く感じていた高校時代そのものに、ぱあっと光が差し込んだ気さえた。

「年がら年中室内にこもってるボクらを太陽の下に出すとか。そもそも、この匂いがいいのになって、思ってたけど、言い出せなかったなあ」

「私も……同じ事思ってた。……運動部の人達が部活してるから、何だこいつらみたいな目で見られるし、嫌だなあ。早く続き読みたいのに……って」

——当時もつとユウゴとこういう話をしてあげよかった。そうすれば孤独を覚える事もなかった。また意味のない「もしも」を練った己を恥じて、手にしたカクテルを一息に呷る。

「……美味しい」

日頃アルコールの類を一滴も口にしない詩織の身に、酔いの火照りが染む。ジュースに近い甘みのお蔭で、確かに飲みやすい。

元々ビールしか飲まなかったのは、夫がビール党だったから。二十になってすぐ彼に教えられた苦い味と喉ごしに慣れ親しみ、以降も飲酒時は基本的に夫同伴だったため、他の酒を注文するという機会自体が訪れず、この歳に至った。

「良かった。お代わりならいくらでも取ってきてあげることから、飲んで飲んで」

「あ。う、うん……」

若干強引に勧められている気もしたが、そのユウゴの杯もぐんぐん嵩を下げ、もうじき飲み終える状況となっている。また彼に氣遣わせてはと思ひ、押し強さにも吞まれて詩織は杯を傾けた。その喉に、甘い味わいと、酔いの熱がトロリ、流れ込む。

ユウゴは「きつくはない」と言っていたが、ビールよりも酔いの回りが早い気がした。

「それでさ。覚えてる？ ボクらが三年の時、部屋に……」

カラカラと、杯を回しながらユウゴが語る。

「うん……あつた、ね。そんな事……」

眩み始めた意識を支えようと頭を押さえた詩織の様子を見て、真正面の彼の唇が歪んだ、ようにも見えたのだが――。

徐々に判断力を喪失する詩織には、じき、それが現実だったのか、気のせいなのか、夢の出来事の一部なのか、判然としなくなった。

2

「……は、あ」

ユウゴの語る内容に共感し、時に話題を振られて応じる楽しさに引き込まれた結果。自然と酒も進み、カクテル四杯を飲みきった詩織は、女子トイレの個室に入り、洋式便座に腰を下ろしていた。

夫の付き添いがあった過去の酒席では、ビール二杯が限度だった。それ以上飲めないというのではなく、妻が人前で酔う事態を許さない夫の制止があったから。ゆえに二十八にもなつて自身が許容できる酒の量さえ知らぬまま。

今宵初めて、眩み、体感の減退、身の火照りといった酔いの兆候を経験している。意識がぼやけるのは不便ではあったが、不快ではない。周りの目を意識して気を張っていたのがほぐれゆく感覚に、むしろ心地よさを覚えすらした。

(来て、良かった)

自分にだつて語れる高校時代の思い出があったと気づかせてくれたユウゴへの感謝が胸を衝く。ただただ忌避していた当時への回想を苦に思わなくなった事で、心置きなく前を向いて、明日からの日常を歩める気がしていた。

「ん……ふ……うっ」

腹部に力を入れてひりだした尿液が、一滴、二滴。粒となつて落ち、便器の水面を波打たせる。トイレ内に五つある内の一番手前の個室に、漏れる直前で駆け込んだの

が、五分ほど前。さすがに出尽くした膀胱も軽くなり、尿意自体も消失した。

一方で、アルコールを排泄した事で幾分かは和らいだものの、まだ頭の眩みも、身体全体に行き渡った体感の鈍りも解消されてはいない。

膝上に置いたバッグから取り出した携帯電話のパネルに目をやると、表示された時刻は午後九時を回っていた。

「……帰らなきゃ」

待ち合わせて帰るのは今の調子では無理だし、このまま酩酊状態で帰宅すれば夫の叱責を受ける可能性が高い。さりとて酔いを冷ますため時間を潰すより、とにかく安らげる自宅へ戻りたいとの気持ちが強く、ふらつく足に行動を促した。

席に待たせているユウゴに挨拶だけして、帰宅しよう。楽しい時間との別れを決意した詩織が便座から腰を上げた、ちょうどそのタイミングで、戸の向こうに複数人の気配がやって来る。

「でさ、さっきの話だけど」

「幹本の事？」

「そそ。あのデブ。良いスーツ着て、羽振りよさげだったでしょ？」

女性二人、いや三人連れ。彼女達の口から出た名字に、酔い蕩けた眼が見開いた。

(幹本……つて、幹本ユウゴ君、よね?)

他に同じ名字の者がいるのかもしれないが、体型と服装共に特徴が一致するとあつては、彼である可能性が高いように感じる。

防音が疎かな作りなのか、扉向こうの声は酔いの回った詩織にも鮮明に伝わったであれば、こちらの声も同じように届くという事だ。意識して声はもちろん息も潜めた詩織が聞き耳を立てる中で、三人連れが話を続ける。

「何でもあいつが高校卒業した後に父親が事業で成功して、今は社長さんなんだつてあいつ自身も重役になつてゐるらしいよ。男子達から聞いた」

「マジ? はあ。昔と違つてビクビクしてないのも、そこら辺が理由なんかね」

「でもさ。それだけ金持つたら、女遊びとか派手にやらかしてそうだよねえ。ほら、あいつ、普通にしてたらモテなさそうだし。その分お金で釣つて、みたいな」

「ああ、うん。そういう感じあるよね」

「なんか女見る時の目がねつとりしててキモいんだよね、あの人」

「いくら金あるつて言つても、あたしはちよつと御免だなあ」

好き放題に話して、化粧直しを終えた三人連れがトイレから去る。

全て聞き終えた詩織は、まだ便座に腰を下ろしたまま。憤懣やるかたない想いを、

唇を食い締める事で必死に堪えていた。

(確証もないのに、よくあれだけ人の事を悪く言えるものね……!)

ユウゴが堂々とした態度を身に付けた理由こそ、又聞きとはいえ情報元があったが、他は全くの推測に由来する悪口でしかない。

高校時代にもああして、人の噂話を虚実織り交ぜて吹聴して回る輩が居た。自分達が楽しめればいいという考えで話を盛っておいて、別の話題ができればケロッと忘れてしまう、無責任極まりない、無自覚の悪意を垂れ流す連中。高校時代の自分は、彼女達のような者と付き合うのが特に億劫で、孤独を選び取ったのだ。

同じように高校時代孤独を選び取っていたユウゴへの同情と共感が強くあったために、詩織の怒りは収まらない。

なのに戸を開けて怒鳴り込めなかった不甲斐なさに、再び自虐が芽吹きもした。

沈鬱な面持ちでトイレを出ると、真向かいから、先ほどまで噂の的だった男がやってくる。偶然なのだろうがタイミングの悪い登場に、バツの悪さを覚えた詩織の足は自然と鈍った。

「あ。いたいた。大丈夫？　ちよつと戻つて来るのが遅いから気になっちゃって」

「あ、あの幹本君。私そろそろ……帰ります」

楽しい時間を供与してもらったのに底えなかつた申し訳なさからくる居心地の悪さを覚えつつ、何も知らぬユウゴに帰宅の意思を告げる。俯き表情を隠す詩織に対し、ユウゴはにんまりと屈託のない笑みを浮かべ。

「そっか。じゃあ、ボクがタクシー手配するから。竹谷さんはロビーでちよつと座って休んでなよ。まだ足元ふらついてるしさ。タクシーが着いたら知らせるから、少し静かな場所で休んでた方が良いよ」

饒舌に、氣遣いの言葉をかけてくれる。

(やっぱり、悪い人じゃないわ)

外見で判断するあの三人連れの方が、よっぽど卑しい。またふつつと怒りが生じかけるのを、口中の唾を飲む事で押し流す。

「……ごめんさい」

反比例して込み上げた申し訳なさにせつつかれ、詩織は詫びの言葉を口にした。

「ん。いいよ、これくらい手間の内に入らないから」

手間取らせた事について詫びられたと受け取ったユウゴが、ニタツと口角を上げて笑う。それは生理的嫌悪感を催さずにいられない、卑屈と猥雑を含有する薄笑みだったのだけだ――。

詫びた理由を告げぬ己の卑怯さを悔いて俯く詩織の目に留まる事はなかった。

3

夢を、見ていた。

いつから見ているのか、どこから夢に移ったのか判然としないながらも、夢だと確信を持てたのは、内容に既視感を覚えたからだ。

三日前、偶々読んだ小説の中の一場面。主人公である妙齡女性が、数年ぶりに再会した想い人の男性と肌を重ねる流れを再現する卑猥な夢に、詩織の意識は浸っていた。玄関も窓も全て締め切られた、互いの体臭と埃の匂いの立ち込めた室内で、ベッドの上に寝かされた女と、それに覆い被さる男。構図もやはりあの小説と同じだ。

『ああ、綺麗なおっぱいだ。吸うよ、いいね』

うっとりとした声で告げる全裸の男は、幸太郎の姿と声をしている。

彼に組み敷かれ、カーディガン、ブラジャーの順で脱がされて、今しがたワンピースまで肩からずり落とされた、女。夫の前に曝したEカップの双乳に、期待を孕ませ胸をときめかせていたのは紛れもなく詩織自身だった。

(こんな夢を見るなんて、私……。はしたない……)

強い羞恥が胸を締めつける。

けれどその一方で、もう何年も言われた事のない性的な言葉を、夫の声で投げかけられるという状況。夫の目がいつになく爛々と情欲に輝いている、夢ならではの至福の事態から、逃れたいとは思わなかった。

恥じらう妻を愛しげに見下ろす夫の顔が、そつと妻の右乳房に接着した。優しく夫を受け止めた乳の膨らみが、彼の身じろぎに合わせてプルプルと揺れ弾む。

『あ、ん。くすぐったいわ。あなた……ひ、あつ』

ちう……と彼の唇が右の乳首を吸う。同時に左の乳首を二本の指で摘まみ、絶妙な力加減で捏ね始める。

『や、ああ……んっ。乳首ジンジンしちゃう……明日にはもうお別れなのに。忘れられなくなっちゃう……』

小説と同じ文言を思い浮かべながら、自ずと火照った内腿を摺り合わす。すると、小さいながらもそれとわかる湿った音色を股の付け根が奏で出す。

(ああ、恥ずかしくて死にそう……でも、これは一時の夢。だから……)

小説の中の主人公、想い人に素直にぶつかっていった彼女になりきって、性的な鬱

屈を解消してしまえばいいのだ。夢の中の出来事であり、夫相手の懸想でもあるのだから、負い目を感じる必要なんてない。

意を決した妻の表情を見て取って、微笑んだ夫が乳房に口づけてくれる。その甘美な衝撃に溺れ、疼きを蓄えた乳房が、夫の口が離れるのと同時にぷるんと跳ねた。

『もう、濡らしているんだね。足を広げてごらん』

夫の逞しい手がワンピースのスカートを捲り上げ、露出した妻の下腹部に視線の熱を突きつける。堪らず震えた両腿を指でなぞりながら、夫は優しい口調で次なる行動を促してくれた。

（ああ……私の恥ずかしい場所に、幸太郎さんの視線が、じつ……と、突き刺さってくるの……感じる。恥ずかしくて、まともに向き合えない……つ）

けれど羞恥に溺れたその分だけ、喜びと悦びが天井知らずに湧いた。求められていくという実感が、湧いていた若妻の心と股に潤いをもたらす。

応じておらずおらずと両脚を開き、ストッキングとショーツの二重の防備に覆われた股間を、伴侶の眼前に曝す。脆いストッキング生地を破かれる事に期待して、惚けた視線を彼の手指に注ぎもした。

（物語の中の彼女がしている事を、真似ているだけ）

都合のよい言い訳が、羞恥と理性に従いがちの詩織に積極性を付与する。

期待通りにストッキングへと伸びた彼の手が、ビィッと小気味よい音を立ててストッキングを裂いた。続けてその手指が向かう先を察して、詩織の側から腰を持ち上げ、露出した純白ショーツの表面に率先して圧を戴く。

夫の指に押されて凹んだ恥丘と、その下の割れ目に恍惚の熱が染みたのを実感した直後。ぷちゅつ、と猥褻な音を立てて、ヒクつく陰唇が蜜を吐いた。

（心臓が、爆発しそう。ああ、でも、凄く……気持ちいい）

羞恥の火照りに負けぬほど熱烈な視線を、股根に感じる。その熱が移ったみたいに火照りの増した恥丘が、夫の指腹に捏ねられるたび恍惚を蓄積した。

ストッキングの上からすりすり、縦スジに沿って擦られるたび、汗ばんだ女の内腿が震える。ヒクつきを強めた陰唇がショーツの裏地に蜜を吐きつけて、詩織の羞恥と恍惚、夫のより積極的な愛撫を誘った。

（小説では、この後、一夜を明かした、の一文であっさり終わってしまったけど）

文字通りの夢見心地に浸り続けたい一心で、本で得た知識を総動員し、詩織なりの続きを創作し始める。

「可愛いクリちゃんだね……たくさん、弄ってあげる」

詩織の思いつきよりも先にねつとりと陰湿な声が響いたが——奇しくも同じ想像に行き着いたがために、眠りのさなかの意識が気に留める事はなかった。

割れ目の上部に咲いた豆粒大の突起が、皮被りの状態からむくり、むくむくと膨らみ始めると、指先で察した彼がそばかり重点的に捏ね始める。

「は……う！ ひっ、あ、あんっ……!？」

実際に口から寝息と共に漏れているのか。自らの嬌声がやたらと鮮烈に耳朵に届く。その違和感も、股根に轟く初めての感覚によって、じき霧散してしまった。

まるで小さな電撃が連続して股の芯に突き抜けていくような、衝撃的で、なのにひたすら甘美な感覚。

直接の刺激が過敏と見て取るや包皮を間に挟んでの摩擦に切り替えた男の指の巧みさが愛しくて、喜悅の痺れが奔る肢体をより密着させる。

「あっ、ああ……もつと、してえ……」

尽きぬ慕情と情欲にせつつかれて、眠る詩織の喉が鳴る。唾を飲んで潤った喉で、偽らざる気持ちを夫に伝えた。

期待を孕んだ頬が紅潮したのを見咎められた——視線の熱を浴びて悟った詩織の股にさらなる期待のうねりが湧き起こり、自然とモジモジ。下敷きのシーツを引き摺っ

て、安産形のヒップが揺らぐ。

ひた隠しにしてきた情欲を全て解放してしまえる喜びに沸き立つ胸を、夫の逞しい手がそつと握り。

「んう……ひッツ!!」

クリクリと、右の乳首を摘まみ捏ねたのと同時に、潤みを増した女陰に浅く潜ったもう片方の手指が卑猥な響きを奏でます。

「ああ……んっ、う……はう……ん！ んん……あ……あっ！」

強過ぎず、弱過ぎもせず、詩織の好み通りの絶妙な圧力で乳房の内へと押し込まれた乳首が、そのまま指の腹で捏ね回される。その都度乳房全体に波及する快楽の痺れが堪らなく甘露で、自然に開いた詩織の口蓋が、よだれと甘い喘ぎをこぼしだす。

(あ、あ……っ、やっぱり……全然違うっ。いつもの幸太郎さんとっ)

現実の夫は、あまり前戯に時間を割かない。精々キスして肌を摺り合わす程度で、期待を溜めて自然と潤んだ膣に勃起を押し込むのが定番だった。

(淡白な人だから、仕方ない……っ。疲れてるのにしてくれてる、っただけで嬉しく思ってた。……なのに)

ねちっこい手つきの合間を縫って、また彼の唇が乳首に吸いついた。すっかり勃起

した乳頭のしこりを確かめるように舌先で爪弾いて、舐め転がし、押しつついては唾液を塗り込める。

現実と夢想の差が広がるほどに、肉の悦びに憑かれた細腰のくねりに歯止めがかからず、胸の高鳴りも天井知らずに増してゆく。

「ちゅぱっ！ ああ、美味しいよ篠宮さんのおっぱい。いくらしゃぶっても飽きやしない……。お礼にたくさん手マンしたげるね」

ショーツの上から擦りついて太い指が脇に逸れ、鼠蹊部をなぞった。そのむず痒い刺激に焦れた尻のくねりを見定めて、太い指が二本、ショーツの脇から内側へと滑り入ってくる。そのまま滑った二本の指は、蜜たっぷりの割れ目へと浅く潜り、互いを馴染ませるように小さく前後上下に行き来し始めた。

「はうっ、うう、んん……ああ、いつ……んはっ、ああ……」

乳首だけでなく乳肌にもキスの雨が降り注ぎ、強く吸い立てられた乳房が引っ張られる感覚。次いで、伸びた乳房が放され、ジンと響く疼きと共に戻ってくる。その疼きが収まらぬうちにまた舐られて、余計に甘苦しい感覚が胸全体にひしめいた。

股間では徐々に移動幅を広げた太い指が、より深い部位の腔壁を扱きだす。時に蜜を掻き出すように鉤状に曲げられた指が、強かに粘膜を穿りもした。蜜を掻き混ぜる

よやくくるくと回った指と指の間で、泡立った粘りの強い糸が引きもする。

乳房と股で響く、卑猥な音色の二重奏。貞淑を守ってきた詩織にとっては、全てが麻薬の如き凶悪な中毒性を伴って感じられた。

（ひっ、あつ、ああ……っ！ それっ、凄……胸とお股と同時に、なんてええっ）
いつしか全く夢想の続きを創作してない事実気づく暇も余裕もなく、ただただ肉の悦びに浸り、胸弾ませ、尻を振る。

「最初が肝心だからね。強引にじゃなく、しつかり丁寧な教えないと、ね」

男の粘着質な声が響く。耳障りに感じて詩織が眉をひそめた矢先に、膣から抜け出した太い指が再度、今度は汁で濡れた状態で勃起クリトリスに摺りついた。

丁寧というよりも執拗という表現の似合うねちっこい手つきで、粘る汁を肉突起にまぶしてゆく。そのヌメリを、潤滑油と、緩衝材の両面で活用して、太い指がクリトリスに擦りつく。汁気に滑りつつ粘液の糸を引き、強かに摘まみ上げたクリトリスを磨くように扱きだす。

「ンッ……！ あつ、ああ……ひあ、ああつ」

刺激の強さに、詩織の脛裏で幾度も白熱が散った。火照りを溜め込み過ぎた肉体に、覚醒の時が迫るのを、否応なく実感する。

同時に、また新たな未知の感覚——下腹部の奥底から湧き上がる強烈な愉悅の痺れを察知して、無自覚なまま詩織の尻が持ち上がり、とどめの一撃を乞い願う。

「イクんだね？ いいよ、たくさん……篠宮さんが望むだけでしたげるから。好きなだけイって、いいからね……！」

親指と人差し指でクリを挟み扱く傍ら、残りの三本を再度膣口に沈めて、穿り蠢かしては卑猥な攪拌音を響かせる。

同時に乳房への吸引と指愛撫も欠かさぬ徹底ぶり、身を伸し掛かせてもくる。小太りな体格の汗ばんだ触れ心地すら、迫り来る悦楽に咽ぶ身には嬉しく感じられた。(駄目っ、怖い……でも、でもおっ、欲しい……！)

恐怖と期待と恍惚の混濁した感情に吞まれた若妻の臉が瞬いて、差し込む眩さに惹かれたように、緩やかに開く。真上数センチの至近距離から覗き込む、夫とは明らかに違う面構え。眼鏡越しの細くイヤらしい眼光が、舐るように見つめ返してくる。

「篠宮さんっ、ほら、ほらっ、イクんだっ！」

旧姓で呼びかける男——ユウゴの指がとどめの三擦りを、これまで以上に素早く勃起クリトリスに見舞った。

驚愕に慄く間もないままに、顎を上反らせた詩織の背に衝撃の波が駆け抜ける。両

脚がピンと張り、とっさにシーツを掴んだ両手にも力がこもった、直後に――。

「やひっ!! ひぐうっあっひいひいッッ!!」

腰から、脳天と足つま先。上下に連続で強烈な愉悦が突き抜けてゆく。その都度、制御を離れた若妻の肢体が痙攣し、上に乗る半裸男の腹肉を揺すった。

(なに、これっ。こんなの……知らない。こんなっ……ああああ!)

未知への恐怖は、意識が白むほどの快樂衝動に吞まれて消える。後に残ったただひたすらの恍惚を、思う存分に甘受して――。

「あッッ! はひっ、いいっ、つうううう……っ!」

蕩けきった嬌声を進らせながら、開きつ放しの瞳に自然と涙が溜まり込むのを知覚した。その涙の意味を、起きぬけの脳で理解する事は叶わなかったけれど。

腰の芯を揺さぶり続ける悦の波の衝撃が、堪らなく甘美で抗い難く、いつしか窄めた双臀にえくぼを浮かべ、快樂が逃げ出さぬよう努めもした。

(ああ……見られ、てる!)

陵辱者の視線を意識するほど、羞恥するほどに腰がうねる。そうしてまた摺れる男の指との摩擦を堪能し、ぶり返してきた波に吞まれて、イキ果てる。

「ひいいっ……あ、はあっあくううう……っ!」

詩織にとって人生初の絶頂は、繰り返し押し寄せる膨大な量の悦の高波がもたらす、延々の恍惚の中で訪れた。

4

「ふひ、ひひっ。ிட்டたね？ ボクの指でマジイキした篠宮さん。可愛い過ぎて、やばあ……うひひひっ」

眼鏡の他には赤いパンツ一丁のユウゴが、子供のようにはしゃいで身を揺する。

肥満体のユウゴに組み敷かれて囚われた詩織の身は、夢想の中と同じ姿。スカートを捲られた上にストッキングまで破かれてショーツのみに護られている股間と、剥き出しの乳房を曝した状態で、打ち震える身を投げだしていた。

「ひ……っ、ああっ！ は、あ、はあ……っ、ひ、また、ああっ……！」

波状に再来する肉悦を浴び、その都度細腰と、ピンと張った両脚を小刻みに痙攣させる。荒く乱れた呼吸を整えようにも、やはり申し掛かる男の重みが邪魔をして、難儀する。募った焦燥が、染み出した恐怖と一緒くたになって、事態の把握に努めようと懸命の脳の邪魔をする。

——どうして？ どうして幹本君と、こんな事になつてゐるの？

言葉をうまく発せられないでいる唇の代わりに、不安に揺らぐ眼で問い質す。

「へへ……」

すると何を勘違いしたのか。赤いボクサーブリーフ一丁のユウゴが、おもむろに唇を寄せてきた。

「ひ……！！ やっ……！！」

とっさに顔を背けた詩織の視界に、見慣れぬ居室の様が映り込む。

詩織自身のそれよりだいぶ広めの寝室は、床に書物が散乱していて、悪い意味での生活感に満ちている。掃除が行き届いていないのか閉じ切りの部屋に漂う空気は埃っぽく、上に乗る男と同じ匂いが隅々にまで立ち込めていた。

「タクシーの中で篠宮さんが寝ちゃったもんだから。休憩も兼ねて、僕の部屋へ連れてきちゃった」

今しがたの口づけ未遂の件も含めて一切悪びれる事なく、言つてのけたユウゴが、にんまりとまた気味の悪い微笑を浮かべる。

（タクシーの中で……寝た？）

男の言葉を受け、詩織が記憶の糸を手繰り寄せてゆく。すると確かに、タクシーに

乗つてすぐの時点ですつりと糸が切れていた。

「だ、だからって、こんな……、っ、痛っ！」

二日酔いの頭痛が、急覚醒する頭に繰り返し嫌な鈍痛を響かせる。その悩ましさも相まって、同窓会の宴席で見せた姿とはまるで違う情欲丸出しの言動を連ねるユウゴへの怒りが増幅した。宴席で語らった時間が楽しかった分、信用していた分だけ、裏切られた思いが強く、どす黒い怨嗟となつて渦を巻く。

「まあわざと強い酒を飲ませたのはボクだし。あわよくば、とは思つてたけどね。こんなうまくいくとは思わなかつたなあ。篠宮さん、世間慣れしてなき過ぎ」

嘘を吐いていたと自白してなお、小太りの腹を押しつけてくる。ふてぶてしいその態度が、詩織の激昂を炙つた。

「放して……！ 帰りますから……離れてっ」

内気な性根にしては稀有な激情に身を焦がし、詩織が上に乗るユウゴを睨みつける。まだ胎内にしつこく潜む情動の余韻も、怒りでどうにか押し殺した。

「駄目だよ、まだ。なんせ十六の時から十二年分の思いがやっとな成就するんだからね。ずっとずうっと片思いしてきた篠宮さんと、やっとな一つになれるチャンスなんだ。絶対、離さないよ」

十二年も想っていたと告げられて、ほんの一瞬氣勢を殺がれた。が、昏睡レイプを働くような輩に心許す謂れなどない。高校時代もずっと邪な目で見られていたと思うと、一層の嫌悪が胸を衝く。

「とにかく退いてっ！ 離れてくださいっ」

早く身体の汚れ、特にユウゴの身体から移った汗と熱を洗い流したかった。激情に駆られ怒鳴った詩織の、釣り上がる眉尻を見て、なぜか恍惚とした表情となったユウゴ。全く理解不能の彼の有様に、恐怖感情が募りゆく。怒鳴り続けていないと挫けてしまいそうで、意識して声を荒らげる詩織の内実を見透かしてでもいるかのように。

「やっ、やめて……」

グツと再び体重をかけたユウゴの顔が、詩織の唇に接近する。横に逸れる素振りを見せたところで肉々しい彼の手指に顎を掴まれ、退路を断たれてしまった。

（幸太郎さん、助けて……！）

この場にはいない夫に助けを請う事に意味はない。それでも唯一すがれる人の顔を思い浮かべた若妻の唇に、分厚い陵辱者の唇が重なり被さる。無駄に弾力のある肉厚唇との接吻は、ただただ気持ちの悪さを詩織の心に刻んだ。

「ぷは、酒臭あ。へへ、旦那さんはキスの仕方教えてくれなかったのかな？ ブルブ

ル震えてまるで初チュー前の女子みたいだったよ」

どうして逐一この男は癩に障る言い方をするのだろうか。エネルギーの無駄と知りつつも、腹立たしさを抑えられなかった。

「夫は……！ あの人は貴方なんかと違って立派な人です！ ……ひっ!？」

眼鏡越しに正視し合う状況にあつて、男の手指が再び迅速に動きだす。

右の手は衣服からこぼれ放しの右乳房に摺りつき、乳頭の円周に沿ってくるくるとくすぐった。

同時に左の手指が純白生地にレース装飾の施されたショーツへと張りつき、絶頂を経て湿り気たっぷりの股布を執拗に、奥の恥肉ごと揉み捏ねる。

「ひっ！ や、あ……っ！ やめ、て……くう、んうううっ」

いずれの部位も、一度覚えた肉の昂りを欲して、即座に内から疼きを発した。

「いっ!?! やっ、痕つけちゃっ嫌っ、ンンッ、ンッ……っああ……」

「んばあ……ひひ、キスマーク。つけちゃった」

乳房と股の痺れに気を取られていると、その間に首筋に強く吸いつかれ、痣を刻まれる。次いで左の乳房上限にも、厚ぼったいユウゴの唇が吸いつき、乳肉ごと啜られた。目一杯引っ張られた末にちゅぽん、と音を立てて解放されたそこにも、男が啜っ

た証拠となる痣が刻まれる。

ジンと疼くそこを間を置かずに舐られると、過敏になって分だけ甘みの増した衝撃が突き抜けた。

「はあ、はっ……ああ……もう、許して……」

一度肉悦の高みを味わわされた肉体の感じやすさを思い知り、そのたった一度の経験で性感帯を的確に見抜いたらしい男への恐怖がより募る。自然と声に混じった弱気が余計に彼を増長させた。

「欲しいって素直に言えば、すぐにぶち込んであげるんだけどな」

居丈高に告げ、詩織の腹へと押し当てられた赤いボクサーパンツの前面。こんもりと膨らむその部位の、火傷しそうな熱量と、下着越しにも如実な弾力と硬度を併せ持った感触に、慄いたのも束の間。窮屈そうに収まった状態で脈動という形で自己主張を繰り返す肉勃起に、否応なく詩織の意識が向く。

（幸太郎さんのと全然、違う……！）

奇しくも幸太郎もまたボクサーブリーフを愛用している。最も身近にいる妻なればこそ、双方の差を推し量れてしまう。勃起状態の夫の膨らみと比較して、ユウゴの股間の容積は倍はあるように見えた。だからといって夫の物が小さい部類とも言い切れ

ないが、ユウゴの物の方が大きいのは確實。

少なからずショックを受けた若妻の傷心には目もくれず、ショーツ越しに摺りついたユウゴの指が、縦筋状にできた染みに沿って滑る。

「ふく……っ!! も、もうやめてっ……やっ、あ、はああん……っ」

穿るように搔かれた薄布の向こうの割れ目に愉悦が奔り、耐えかねた詩織の背が反った。押し倒されて再度ベッドに沈んだ若妻の黒髪が、白いシーツに散らばる。

巧みに緩急のついた指愛撫を施すユウゴに翻弄され、再度、見る間に蜜壺が恍惚を溜めてゆく。

「よっぽど欲求不満だったんだねえ。一度潮噴いてるのに、まだどんどん濃厚なおつゆが溢れて……こんなにグチュグチュになっちゃ、穿いて帰れないねこのパンツ」

「ちがっ、違います。それはっ……貴方が、お酒に何か混ぜでもして……」

夫との営みでは一度も経験し得なかった身体の変化を、男の技巧の手柄と認めたくない。仮に認めてしまえば、夫の技巧の至らなさと、我が身の欲深さをも認めなくてはならぬから。

「ははっ。それはさすがに小説に毒され過ぎ。てか、官能小説とか結構興味ある方なのかな？ だったら後でおすすめ貸したげるね」

あまりに稚拙な女の言い訳を笑い飛ばすのみならず、悪ノリまでしてみせる男に対して、怒りを覚えるよりも先に羞恥に炙られてしまい、詩織の顔が歪んだ。

(逃げ、たい……このイヤらしい視線から。この場から消えてなくなりたい)

自己嫌悪と恥辱に喘ぐ詩織の心境を的確に見抜いていればこそ、嘲笑う傍らでユウゴの手指は乳輪をくすぐり、爪で乳頭の根元直近を搔きもする。なのに決して乳首自体には触れてこない。

股間も直接でなく、ショーツ越しの圧迫と割れ目への摩擦にとどまって、やはり勃起クリトリスに触れずじまい。

ニタニタといやらしい笑みを張りつけた彼の表情からして、わざと感度の高い部位を外して弄んでいるのが明白だ。

「ひっ、あ……くう、うう……酷い……」

乳も股も、特上の快感を体験したばかりなだけに、余計に焦燥が蓄積される。それをはじめに全身に波及し、小刻みな震えと火照りとなつて詩織の精神を揺さぶつた。

なぜ、こうも容易く昂らされてしまうのか。ままならぬ女体の感応に菌噛みしたくとも、口を開けばひとりでに嬌声が吹き漏れる。悔しさも足されて、泣きだしたい想いに駆られながら、詩織はひたすら口を噤もうと腐心していた。

「……気づいてる？ 篠宮さん、自分から腰振って、足もぱっかり開いちゃってるよ」
言われて目を向け、初めて気づく。まだパンストに包まれた状態の尻がシーツを引き摺り、まるで摩擦を堪能するが如くくねり蠢いていた。

つま先まで伸びた状態の両脚が、焦れに悶えて震えながら、目一杯左右に開き、狭間に身を置くユウゴを許容している。

「どう、して……ひっ!! あ、やああ……」

自覚した途端に自虐と、それに伴う恥悦が駆け巡り、余計に焦れたショーツの奥の陰唇が、物欲しげに蠢動した。

「ね。もう、素直になっちゃおうよ。ボクのちんぽが欲しいって、言っちゃおう？ 欲求不満マ○コにずつぶししたらきつと、物凄く気持ちいいよお？」

「そんな事っ、絶対に言わないっ……ふあっ、あひっ、イイああ……っ！」

グリグリとショーツに押しつけられるボクサーブリーフの、内なる膨らみ。その容積と熱量、猛々しい脈動。否応なしに刻まれる存在感の強さが、嫌でも想像をさせる。もし、こんな太いものが股の間の穴に突き入ったら。ムリムリと肉の穴をこじ広げられて、粘膜をこそぐ勢いで摺りつけられたりしたら――。

（駄目。駄目よ。思い浮かべたら、駄目なの……!）

「敏感乳首ちゃん。ボクがたあつぷり慰めてあげますからねえ……あむっ」

ちゅぽちゅぽと音を立てて吸われた左乳首が、悦びの呻きを発して一層尖り勃ち、口中で待ち構えていたユウゴの舌に自ずと触れた。

「ふくっ！ うう……いやっ、はう……！！ うー、あは、ああつ。ん！」

チロチロと舐め転がしては巧みに悦びを引き出す舌つきの巧みさが、そのまま詩織の脳内で肉棒挿挿の技巧に転写され、牝腰のくねりを誘った。

「おつゆたつぷりのお股も、好きなだけ可愛がつてあげる。また可愛く鳴いてイクところ、見届けてあげるよ」

「ひっ！ 駄目えっ、そこはもうっ、触ら、ないでえっ……いや……ふっ、ううあー！ 耳元で囁かれ甦る、恥辱の記憶。人生初絶頂を迎えた際の、ユウゴの纏いつくような視線を思い出すだけで、怖気が溢れる。なのに自然と股の付け根がキュッと、まるでもう一度潮噴きたがつているように、収縮した。

「ほら。ほらほらああ」

膣の動きを気取つてすぐに、男の太い左手指がショーツの脇から内へと潜り入る。すでに蜜たつぷりの壺穴を、縦に突いたかと思えば、壁面に沿って穿り滑り、指の腹で膣肉を揉み押しして、止め処もなく染み出す蜜を掠め取つてゆく。そうして得た蜜を

潤滑油に指愛撫のペースを上げながら、絶えず眼鏡越しの眼光で詩織の表情を窺う。

（本気、だわ。この人……本当に、私の恥ずかしいところ、全部見逃さないつもりで……あ、ああ……っ、見られたくない。嫌なのに、私……っ、どうしてえ！）

見届けてあげる、と告げたユウゴの粘ついた声と、卑猥に歪んだ笑顔、一刻として離れないイヤらしい視線。三つともが淫蕩の熱源となつて、穿り回される股穴の蠢動を招く。

「はひっ、いあああつ、もお恥ずかしい音させないで……ひっんくううう！」

ユウゴの指の動きに乗じて、掻き混ぜた蜜汁がヂュポヂュポと、猥褻な音色を響かせる。正面から注ぐ彼の熱視線を浴びて一層強まった羞恥の熱が、股に染んだそばから被虐の悦に成り代わり、止め処ない蜜の生成に繋がった。

こちらにも刺激を、と焦れ疼く乳房には期待のうねりがひた奔り、荒く乱れた詩織の吐息がユウゴの鼻筋をくすぐる。

「いいよお。愛し合つてるって感じ、するよお」

独り善がりな言葉を連ねるユウゴの様が、生理的嫌悪を詩織の胸に押しつけた。

（気持ち悪い気持ち悪い……！　なのに……どう、してっ）

拒む心が強まるほど、たまりかねて動いた肢体に淫熱が染み、シーツを掻いた尻か

ら背に恍惚が響く。

「く、ふふ……」

男が嗤い、詩織の右乳首を摘まんで引つ張った。

「んくうツツ！ うう……嫌……いやあつ」

拒絶の言葉と裏腹に、詩織の瞳がトロリと蕩けた瞬間を見逃さず、ユウゴの膣内を穿る指と、乳首を摘まみ扱く指とが速度を上げる。

「ひっ、あ、あひいんんっ。駄目、駄目ええ、ひっ、やああああ」

詩織の性的昂揚の上昇とびったり歩調を合わせた愛撫は、効果靦面。爪弾かれた乳首は乳房全体に恍惚の痺れを行き渡らせ、膣の上壁を穿られた股穴は蠢動の間隔を狭めて男の指に吸着する。

「はぶっ。ひひ……んぶ、ぢううううっ！」

駄目押しとばかりに左乳首を吸い立てたユウゴの歯が、浅く乳輪へと食い入った。詩織が痛みと、直後に訪れた甘い痒みに咽んだ瞬間も、男の瞳は余さず捉え記憶する。「はひいつ、いひやああああ……！」

ひと際緊縮した膣内で蜜が噴き出るタイミングを知っていたかのように、ユウゴの右手指が膣の上壁を優しく揉み押す。それが引き金となって、ぶしゅうっ、と勢いよ

く、粘りの強い蜜がしぶいた。

溜まりに溜まっていた全てを吐き出すように勢いづく蜜の飛沫が、上に乗るユウゴの下腹、特に押しつけられていた赤いボクサーブリーフの膨らみを満遍なく濡らす。そうして陰影のより際立つた肉棒が、興奮度合いを示そうと猛々しく弾んだ。

あまりにも獣じみた男の逸物の挙動に心を惹きつけられたまま。

(見られてる！ 全部見られ、て……私いいいっ！)

再来する恥悦の怒濤の勢いに吞まれ、詩織は二度目の絶頂に脳天まで浸かり込む。張りついたままのユウゴの視線を意識するたび、身の内にぶり返す波状の悦衝動。それを甘受する細腰がシートから浮き、真上に乗った男の股間と擦れて、また解放感伴う潮汁を吹きつけた。

「はひイツ、見ない、でええ……っ！ んぐっ、うっ、ああ——……っ！」

「へへ、ベチョベチョになっちゃった。これは脱がなきゃ仕方ないよね。詩織のリクエストに応えて、生チンポ見せてあげなきゃ」

うっとり吐き出す男の禍々しさを厭う気持ちは相変わらず根付いている。逃げ出さなければどうなるか、わからぬほど意識朦朧としているのでもない。

ただ、快楽に惚ける肉体が、思うように動いてくれなかった。

「っへ、ひひっ。高校一年の時から、ずっと、ずっと好きでした」

「ひ……っ！ ああ……やめてっ、そんな目で見ないでええっ……」

純朴な男子学生がするような告白と、欲情にギラつく細い眼光。対照的な二つをぶつけて、ユウゴがブリーフを引き下ろす。

「——ッツ!!」

潮蜜の温みも付け足されて火傷しそうなほど滾る剛直と、じかに触れ合った途端、声にならない引き攣りが喉を震わす。長さも、太さも、熱量も、硬さも、姿形に至るまで、夫の物とは似ても似つかない。

幾つとも血管を浮かび上がらせて伸び上がる肉棒は、夫の勃起の優に倍——七、八センチほど長い。幹周りも明らかに肉厚で、ごつごつと筋ばったそれが密着状態で期待の脈を響かすたび、猛々しい振動がショーツ越しの股根を襲った。

「んくううっ……！ はあ、っ、ああ、やめて……」

強制的に与えられた恍惚の衝撃に、惑い、怯えた詩織の目に涙が浮かぶ。恐怖に彩られた視線を浴びてなお、より嬉々と滾った肉幹がショーツに浮いた縦筋状の染みに押しつけられる。凶悪にくびれた雁首と、その上に鎮座する嵩高の龟头部はいずれも使い込まれて黒ずんでいる。

じかに肌で感じた形状と熱氣、見下ろす眼に垣間見えた先端部の色艶。一様に悪辣な印象を植えつける肉勃起に、禍々しきすら覚えてゐるのに――。

グリグリと穿られた下着越しの媚肉が、物欲しげにパクつき、恍惚を蓄積する。股間への圧を受けて腰から下は痙攣が止まらない。内に巡る痺れに耐えようとシーツを掴んだ両手の平に、じつとりと淫熱と汗がにじむ。

(駄目……駄目、駄目エエエっ！)

——もう、抗うすべがない。諦観に陥りそうになるのを、必死の思いで踏みとどまる詩織の目を、相変わらずジッと眼鏡越しの眼光が捉えて離れない。

「ああ、念願の……っ、篠宮さんとのセックス！」

興奮し過ぎて豚の如く鼻息を吐きつける一方で、慣れた手つきでユウゴが汁にまみれたショーツを脇にずらしてしまふ。

二度の絶頂汁でドロドロの秘部を凝視される事態に際し、胸の鼓動が早鐘の如く鳴る。恐怖に慄いた眼が見開き、全身に怖気と強張りが巡った。

「ふあ……っ！ あ、ああ、お願い……っ」

許して、と続けようとした詩織の言葉を遮って、男の腰が押し出される。ぐちゅ、と蜜と先走りの溶け混ざる音が響き、互いの生殖器に面映ゆい恍惚が突き抜けた直後。

脇に寄せられたショーツから覗く、淡い陰りと濡れた割れ目が慄き震えたのを見計らい、男の酷薄な声音が響いた。

「お待ちかねのチンポだよお……!!」

余りある蜜で潤みぬかるむ膣口を、硬く滾った剛直が滑るように一気に突き破る。

「んひいッあああああ!」

詩織にとつて半年ぶりとなる性器結合は、かつてない強烈な衝撃を伴い訪れた。

「くふうっ! おほ、おおお……ちんぽ吸い込まれるうう」

根元まで突き入った状態で嬉々と震える牡の脈動が、割り裂かれたばかりの膣肉に波及し、膣全体の収縮を促した。夫との交合では得た事のない深い結合感に、惑い、慄き、怖じたはずの女芯から、切々と情欲の渦が湧き上がる。

「んっひいイイッ!!」

「うはあっ……締まる、締まるうう……挿入しただけで軽くいつちゃうなんて、やっぱりボク達、相性抜群だねえ」

上体を起こし、正常位の体位で詩織と繋がったユウゴが、眼鏡の奥の細目をより細めて恍惚に浸る。その背と声に奔る小刻みな震えが、彼の内にも性的快楽が雪崩れ込んでいる事を示していた。

「イツ、てなんか、つは、ああ……っ！ んっ、ふっ、あひいイツ！」

口でいくら否定しようとも、結合した股を伝い、全て筒抜け。二度の絶頂で準備が整いきっていた腔穴が、太い幹を易々呑んで食みついている。覆しようのない現実が、詩織の胸に慟哭を、ユウゴの股間にさらなる滾りを足す。

「ひッ！ ううあつ、あは、ああんんっ……」

深々と潜った肉勃起が、腔奥付近の上壁をやんわり押し上げながら脈打った。その圧倒的な質量と熱量、脈の猛々しさ。全てが混然一体となつて詩織の情動を誘った。

「じゃあ、動くね。たっぷり気持ちよくするから」

告げるなりユウゴが腰を引く。ズルズルと抜け出る肉凶器の摩擦に犯されて、まだ収縮真つ最中の腔壁が盛大にうねり悶えて、また、搔き出された蜜が漏れるのと同時に喘いだ詩織の胸元で、双乳が弾む。

「ふっ、うぐ、うううっ、せ、せめてゴムをつ……お願いいいっ」

再来した摩擦快楽が、嘆く若妻の腰から背に巡り、海老反った上体が淫熱を汗ごと噴いた後にまたシートへと沈んだ。

レイプされた実感を肉悦の只中で噛み締めるにつれ、新たな危機感が胸を衝く。

「詩織との初セックスは生……つて十二年前からずっと決めてたんだよ。だから、そ



もそも用意してないよ。ごめんね」

「そんつ、な……じゃあ、抜いて！ うう……ふぐつ、うう、抜いてええつ」

全く気持ちのこもっていない謝罪を受けて、妊娠の恐怖を強めた膣肉が緊縮する。それを見越していたかのようにスリスリと、肉の幹が膣の上壁に摺りついた。

（ちが、うつ。これつ……幸太郎さんのと擦れる場所が全然つ……！）

夫のペニスの切っ先が到達し得なかった、膣洞の、全長の三分の二近辺。

ユウゴのペニスは苦もなく届いて、肉壁に丹念な摩擦と圧を施してゆく。

彼が腰を押し引きするたび扱き上げられる膣の上壁に、夫との交合では一度も得られなかった火照りと、愉悦を伴う痺れが溜まり込む。

熱と痺れをたっぷりと吸った膣全体が、異物である肉棒をぎゅつと抱き締め、揉み捏ねる。そうしてますます猛った肉棒の鼓動と共に吐き出された先走りのつゆが、より小刻みで速いピストン運動を実現させた。

「あぐ、つ、んんうつ、はひ……んつ！ んはあ……うう、んつ！ んんんうううつ」
「そこが、イイんだね？ いいよお。たくさん、たつくさん、擦ってあげる。好きなだけイカせるって約束したもんねえつ」

約束などしてない。一方的にユウゴが宣誓しただけだ。そう言い募りたくとも、

彼の腰遣いが許してくれなかった。

ユウゴが腰を八の字に回しだすと、男女の分泌液が亀頭にシエイクされて泡立ち、膣内のあちこちで粘々と糸を引いた。あまりにイヤらしいその感覚が、腰の芯のみならず脳裏にもしつこくこびりついて、延々詩織の被虐を炙り立てる。

(幸太郎さんとするのと全然違う。こんなセックス、知らない……！)

小刻みに押し引きして、腰の回転も交え、膣の四方の肉を丹念に捏ねほぐしてゆく。直線的に突き押しばかりの夫・幸太郎のピストンとはまるつきり別物だ。

「力押しでされるよりも、ネチネチされるほうが好きでしょ？」

「んく、うう、そんな事つ、やあ、あひつ！ ン！ ンンう……っ」

事実、ユウゴのねちっこい律動によつて膣肉は嬉々と躍動し、焦らし合いすら楽しむように肉の幹に舐りついてた。

電雷めいた痺れは、若妻の四肢末端を震わすのみならず、快感を認めず抗う頭の中でも繰り返し轟いては弾け、理性と抵抗心を削ごうとする。

「ボクのチンポの長さだと一番擦りやすい場所に弱点持つてるなんて、本当に運命的だ。嬉しい。嬉しいよ詩織いいっ」

呼び捨てられた事を厭う余裕もなく、性器の作りと性癖、二重のフィットぶりに恐

怖した。こんなにも相性の良いセックスを知ってしまったら、夫との行為では満足できなくなってしまう。否、そもそも満足できていなかった肉体の疼きが、より耐え難いものに変質して日々の生活に影を落とすのでは、と。

(そんなの嫌っ！ 耐えて、逃げて、私は幸太郎さんの所へ帰るんだから……！)

せめて心だけでも強く、抗いの意思を瞳に乗せて——そんな儂い抵抗までも、ユウゴのテクニクが瞬時に手折ってしまう。

「ひひ。じゃあ次は……こういうの、どうっ？」

「な、何するの……っひぐっうううッ!!」

ユウゴが両手で詩織の脚を抱え、蜜まみれの淫尻がシートから浮き上がる姿勢に固めた上で、肉棒を突き入れた。浮き上がった尻の真上から体重の乗った一撃が、再度深々、膣奥近辺まで一気に突き抜ける。

ともすれば幸太郎がする力ずくのピストンと同じになりかねない強烈な衝撃は、ほぐれた柔肉に抱き留められ、ただひたすらに甘い衝動を膣の隅々へと行き渡らせる。

「はあっ、っひ、いああ……あああっ！」

バチバチと白い火花が詩織の脛裏で弾け散り、雷に打たれたように痙攣した背が大きく反った。ひとりでに前後に跳ね動く牝腰を、男の太い手指が抱き締め捕らえ、揉

み捏ねる。

「おっぱいも。寂しらせてごめんね」

「ひ……ああつ！　だ、駄目。今されたらつ、あああつ、すぐまた、ああつ」

弾んでいたEカップバストが、じかの愛撫を恋しがり疼いてみせた。その瞬間を完璧に汲み取り、彼の指が乳輪を扱く。乳肉を揉み立てあやした後に、絞り出したばかりの期待に違わぬ摩擦を乳首に注いだ。

（疼いたそばから、全部、気持ちよくさせられて……味わわされ続けたら、頭がおかしくなってしまう……）

指腹に摺り潰され、乳輪へと押し込められた勃起乳首が、悦び勇んでなおすがる。

もう一方の手中に収まる尻肉は、谷間に滑り入った指先の接触を期待して、奥に潜む窄まりを開閉させた。

全てを、彼の眼鏡の奥の眼が見届ける。彼はまた、肉悦の高みに浸り溺れる瞬間まで余さず網膜に焼きつける気だ。

（また、お漏らしするところ見られちゃう……！）

確信が深まるほど詩織の恥悦は高まり、自然と腰のうねりも大きくなっていった。

「く、ふふっ。ボクの視線を感じるたび、オマ○コ、きゅつきゅつて締めちゃって。

ああ、最高だよ詩織いいっ……」

うっとり告げた彼が再び上体を倒し、詩織の上へと覆い被さる。直後から亀頭の丸みを活用して、再度詩織の弱点——膣の半ばを歩き過ぎた位置にある上壁を、挿り鉢の如く押し捏ねだす。

「んぐっ、うう！ それ、やつ、あう、ううんんっ！ やめっ、やめてっ、それっ駄目えっ……また出ちやううううっ」

「漏れそうな危機感が堪らないでしょ？ キュンキュン締まってるよおっ」

摺り潰れた柔肉に、夫ではない他人棒の脈動と、先走りのつゆが染み馴染んでゆく。身をもって許容し難い事実を痛感するほどに、尿意に似たシグナルが膣内に巡った。

「噴く瞬間までちゃんと見ててあげる。一番可愛い詩織のイキ顔、記憶するよお」

「ひい……っ！ やあああっ」

反射的にベッドの上でずり上がり逃れようとした若妻の腰を、ユウゴの両手ががちり捕えて、なお執拗に柔肉を抉った。

同時に乳から移った指を結合部に滑らせ、蜜を掬いながら割れ目上端にスライドさせる。限界を訴えヒクついていた勃起クリトリスにたどり着くや、丁寧な手つきでヌメリを摺りつけた。

「ひやうツツ、うつ、ふぐ、ううううううつ！」

詩織好みの圧力で摘まみ捏ねられる豆突起に、ひっきりなしの快楽電流が轟き渡る。空いた乳房には唇が吸着し、甘痒く痺れた乳首を舐り転がしてひと際の恍惚を刻む。一つ所にとどまらない男の技巧に、溺れゆく肉体を引き留めるための支えは結局、ただ一つしかなかった。

（幸太郎さん、幸太郎さん、幸太郎さんつ）

夫との日々。育んだ日常。ささやかな幸せ。それらにすがりついていなければ即座に転げ落ちかねぬほど、ユウゴの愛撫とペニスは、あまりに詩織に適合していた。

「詩織がイクのと同時に中出しするよお。一緒に、イこうねえ……！」

「駄目えええつ、外！ 外にイイイッ！」

怯え慄いた眼が見開くのと同時に——詩織にとって、聞き慣れたメロディが室内に響く。脱がされた服の横に置かれたバッグの中からではなく、カーディガンの下から届いたそれは、詩織の携帯電話の着信メロディに他ならなかった。

「幸太郎つ、さつ……んぐうつ！ ううう！ はあ、あひイイイッ……！」

電話をかけてきた相手の、心配げな表情がすぐさま頭に浮かび、直後にズンと腹に響いた肉凶器の衝撃に、視界もろとも揺さぶられる。直撃を受けて跳ねた細腰の芯に、

切ない痺れが幾筋も突き抜けてゆき。

(見ないで！ そんな目で見ないでええええ！)

頭に浮かんだままの夫に見つめられているかのように錯覚し、詩織の全身から汗が噴く。引き攣る四肢が無自覚のうちに突っ張って、来るべき衝撃に備える。

「ふうっ、ううう……ふひひっ！ 締まる締まるううう！ 全部出すよおおお！」

吠えたユウゴの熱視線も併せ、二重の視姦悦に炙られて緊縮した膣内に、大量の蜜が溢れ出す。

その蜜ごと引き絞られた肉の凶器が、律動しながらひと際強烈な鼓動を放った。鈴口を開いた亀頭が、柔い膣内壁に目一杯擦れて――。

「ヒイツ、あ……っひあッあッあああ………ッツ!!」

申し掛かるユウゴの腹肉と、組み敷かれた詩織の股座。二つの震えが同調した。

「くふうううっ、ああ、最っ……高おおおっ……はひ、ひひひひひイツ！」

繰り返し収縮する膣洞に、煮えたぎった情欲のマグマがぶち撒かれる。滝の如き勢いで噴きつけた濁汁は、詩織の弱点である膣の上壁肉を強かに抉り押し、漬け込んでなおとどまらず、勢いを少しも弱める事なく膣内全域へと流入した。

流れたそばから粘膜にへばりつく子種汁の生命力の高さを感じして、嘆きと悦び

半々の激情に吞まれた詩織の意識が弾ける。

(ああ……ま、た……ああつ。じつと、見てるううつ……)

背徳の熱と粘りをたらふく仕込まれて、否応なしに昂りきった膣全体が小刻みに痙攣する。ビグビグと互いに摺りつけ合った男女の下腹が波を打ち、射精真つ只中の状態で締めつけられた肉棒が、再度大量の濁汁を膣内に噴射した。

「ふう、ふ、うう……！ 十二年分の想いの丈、全部全部注いじゃうよオオ！」

亀頭と膣壁を摺り合わせて、自ずと刺激を強めたユウゴが、涙声で吠え叫ぶ。

「ひつ、あつ！ んひひひひひひつ！ ふぐつ、うううううう！ ま、たああつ、あ

ああつ漏れ、ちやううううつ！」

白濁の子種汁を吸って一層柔くほぐれた膣肉が、追加の刺激に攻め落とされ、蜜を噴く。結合部から噴き上がった潮汁が、一層男女の性器の摩擦と密着を高めてしまう。圧倒的な悦びに溢れ返った膣洞から乳に、尻に、頭に痙攣が波及するのを、痛感した直後。解放感と恥悦がさらに一段、詩織の性感を跳ね上げ、瞳がぐるり、裏返る。

「うう……ふつ、ぐ、ううう……許、して……あつ！ あひイッひイッひイッ！」

夫への懺悔のため、陵辱者に許しを乞うため。二つの意味の含まれた懇願を重ねる傍らで、がっちりとうウゴの手に抱き囚われたヒップの中枢に轟く、三度の絶頂衝動

を食い締めた。

疲弊が広がり脱力する女体に、ドクドクと種付け振動が轟くたび、未だ脳裏に思い浮かんだままの夫の表情が掻き乱れ、奥から顔を出したユウゴの恍惚顔が映り込む。

口上通りに最後の一滴まで絞り出しきるつもりで、ゆるゆると擦りつく肉欲棒。

「ああ……あ、ひっ！ ひあっああ——……っ！」

対する若妻の肉壺は、あまりに脆弱な防備を呪う間もなく、ただひたすらに熱々の種を受け容れていった。

5

全て出し終えたユウゴが詩織を解放したのは、肌を重ねてから一時間余が過ぎた、午後十一時過ぎの事。

「またここに来れば、望むだけ気持ちよくしてあげるよ」

ベッドから出て全裸姿で腹肉を揺すり、缶ビールを傾けるユウゴ。不寐で醜悪なその彼が、今後も密会を続けたいかと持ちかける。

一方、もはや怒りも湧かぬほどに摩耗した精神と、五度の絶頂を与えられ疲労の極

致に達した肉体を引き摺りながら、詩織はぼんやりと考えていた。

(……まだ、今からなら終電に間に合う)

部屋の主の勧めに応じてシャワーを浴びた肢体は、隅々まで洗い流してあったが、唾棄すべき男の臭いと感触がまだこびりついていて、気がしてならない。特に念入りに洗浄した膈内にも、まだ粘性種汁と剛直の感触が強烈に染みついている。

胸元や首筋には陵辱の印がより鮮明に、キスマークとなって刻まれてもいる。

それでも、ねちっこいユウゴの視線を振りきる事に、躊躇いはなかった。

「……今夜の事は、忘れますから」

着直した衣装の皺を伸ばしつつ、ハンドバッグの中身に欠けがないのも確かめた、その上で、二度とまみえるつもりがないのを背を向ける事で示し、部屋を出る。

エレベーターで下り、マンションを出ても、ユウゴは追ってこなかった。

夜風に冷まされた女体には罪悪感と後悔だけが堆積し、夫にどんな顔で会えばいいのか、そればかり考える。ノーパンの股が摺れるたび、苛つきが募る。

結局汁まみれのショーツはユウゴの部屋のゴミ箱へと投棄してしまった。情交の記憶の染みついた下着を、たとえ洗っても穿く気にはなれなかったし、あれを自慰の種にでもしてユウゴが留飲を下げるようなら、それでいいとも思ったから。

(とにかく、幸太郎さんが傷つかない事。それが一番、私にとって大事な事だから) 潔癖な夫には、陵辱されたという事実が前提にあっても、手垢のついた妻と変わらぬ態度で接するのは酷な事。彼に無理をさせたくないと思うから、事を公にする、法に訴えるという道はありえない。

(私が我慢して、済むのなら。明日からまたいつも通りの日常を歩めるなら)

とにかく、もう二度とユウゴとまみえる事はないのだから、一夜の悪夢と思い、早々に忘れてしまうのが最善。ざわつく胸の内を強引に納得させて、夜道を早足で歩む。忌まわしい記憶が付随するだけにタクシーを呼び留める気にもなれず、最寄りの駅まで徒歩で赴く腹積もりだった。それでも終電には間に合うはずだ。

「もう、寝ちゃってるわよ……ね」

明日も出勤する夫が起きて待っていてくれる可能性は、低い。けれど、もしかしたら——淡い期待にすぎり歩む詩織の足首を、そよいだ夜風が撫でくすぐる。生温かなその心地は、ユウゴのねっとりしつこい視線にどこか似ていた。

(忘れるの。それが一番、なんだから……)

首を振り、足取りを速める事でぬるい風を振り払った詩織の眦には、涙跡と、固い決意が滲んでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>